
エンドレスラブ

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレスラブ

【Nコード】

N0953P

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

男と女は分かっていた。

二人の仲はもう終わっているのだと。

別れを告げて、それぞれの道を歩き出す。

あるレストランで、男と女が向かい合い、静かに食事をしていた。張り詰めていた空気を先に破ったのは男の方だった。

「そろそろ、終わりにしないか」

「そうね」

ナイフを動かす手は相変わらずそのままに、まったく驚きもせず、ごくごく当然のことのように女は返し、そして、肉片を口に運んだ。男はワイングラスを手にし、真紅の液体を軽く口に含んだ。芳醇な香りと、かすかな苦味は、彼女を彷彿とさせなくも無い。

「一目ぼれだったんだけどな」

「私もよ」

そこで男と女の視線は絡み合い、そして同時に、言い放つ、
「でも、時間の無駄だったみたいだね」と。

二人は思わず苦笑いをする。

「本当に時間の無駄だった」

「今、こうして別れ話をしているという記憶すらも無駄ね」

二人は店から出ると、さよならも言わず、そのまま互いに逆の方
向へと歩き出した。もう二度と会うことはあるまいという思いを胸
に抱いて。

その帰り道、男は足を滑らせ駅の階段から落ちた。一方、女は立
ち寄った古本屋の書棚から崩れ落ちた分厚い書籍でたたかき頭を
打った。

白い壁に囲まれた病院で、一人の男と一人の女が会う。

「はじめまして。俺は記憶喪失で入院しているんだ」

「私もよ」

「でも」二人は声を揃えて、「始めてあった気がしない」

激しくも甘い胸のときめきに、これが一目ぼれというものなのか
と、彼と彼女はほとばしる激情の渦に飲み込まれていく。

（後書き）

すなわち腐れ縁。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953p/>

エンドレスラブ

2010年11月23日22時15分発行